

重要な構成要素「二天門」に て ん も ん

建築：1896（明治 29）年

帝釈天の景観を構成する要素

1896（明治 29）年に落慶した入母屋造瓦葺の柴又帝釈天きょうえいざんだいきょうじ（経栄山題経寺）の玄関口となる門です。日光東照宮（栃木県）の陽明門ようめいもんを模したと伝えられ、江戸期建築の最後の名匠めいしょうと言われた坂田留吉棟梁さかたとめきちとうりょうによって造りあげられた、江戸期の寺社建築の系譜を受け継ぐ、総檜造りの豪壮な構えの楼門ろうもんです。

屋根は唐破風からはふ（注 1）とその上に千鳥破風ちどりはふ（注 2）を付す江戸期以来の伝統的な社寺建築の形式を有します。楼門は二層からなり、下層には中央を通路とし、参道側から見て右手に増長天ぞうちょうてん（注 3）、左手に広目天こうもくてん（注 4）を安置しています。上層は一室となっており、四周に高欄付きの縁が廻らされています。

彫刻も豊かに施されており、帝釈堂の正面に位置する楼門として高い格を与えられたものであることがうかがえます。表側の彫刻は横浜住吉町の彫物大工 加藤勘造一門かんぞう、裏側は名人「波の伊八」いはちの系譜をひく四代伊八・信明のぶあきによるものといわれています。通路側の門の上には、神猿まざるを従えた帝釈天の像が掲げられ、各所に庚申信仰こうしんしんこうとの関連が想定される猿が忍び込ませてあり柴又帝釈天ならではの細工が見られます。

この二天門の落慶から 3 年後の 1899（明治 32）年、柴又に帝釈人車鉄道じんしゃてつどうが開通し、近代化が進んでいきます。それに伴い、よ

り多くの人々が帝釈天を訪れるようになり、二天門はその入口で参詣客を迎える象徴的な建造物として存在感を示していくことになりました。



大正末期～昭和初期頃の
二天門
(原資料：個人蔵)



昭和 40 年頃の参道から見た
二天門 (個人蔵)

(注 1) 破風とは入母屋造りなどの屋根の両端の三角部分のこと。唐破風はそのうちの反転曲線を持った山形の破風 (日本国語大辞典)

(注 2) 屋根の斜面に取り付けた三角形の破風 (日本国語大辞典)

(注 3) 帝釈天に仕える四天王の 1 つで南方を守護する神 (日本国語大辞典)

(注 4) 帝釈天に仕える四天王の 1 つで西方を守護する神 (日本国語大辞典)

【参考文献】『平成 28 年度 企画展図録「葛飾・柴又の宝物」—知られざる歴史・文化的魅力—』
葛飾区郷土と天文の博物館 (2016)

『葛飾柴又 魅力再発見』葛飾区産業観光部観光課 (2020)

『帝釈天題経寺建造物調査報告書』葛飾区教育委員会 (2022)